

平成26年度鹿児島純心女子大学キリスト教文化研究センター公開セミナー
『キリスト教と教育』

基調講演 「大学におけるキリスト教教育」

ドイツ文学者・前フェリス女学院院長

小塩 節

日 時:2015年2月20日(金) 14:00～16:30

於 :サンタマリア館 階段講義室

小塩節先生講演(その1・要旨)

獅子目: それでは時間になりましたので始めさせていただきます。皆さまには本学キリスト教文化研究センターの平成26年度公開セミナー「キリスト教と教育」にお集まりいただき、ありがとうございます。

今回は長年、大学教育とキリスト教的人間教育に携わり、また敬虔なクリスチャンでもいらっしゃる小塩節(おしおたかし)先生をお招きいたしました。先生には大変お忙しいお立場にもかかわらず、ご快諾をいただき誠にありがとうございます。本日、司会進行は私、キリスト教文化研究センター所員の獅子目が務めさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。早速始めさせていただきます。

本セミナーは本学FD・SDとしても位置付けられておりますことを申し上げて、最初に松下学長がご挨拶申し上げます。よろしくお願いします。

松下: 皆さま、こんにちは。今日は大変いいお天気になりました。また、梅の香りがどこからともなく漂ってくる季節になりまして、もう春がすぐそこまでという季節になりました。

本日は「キリスト教と教育」と題する講演を伺う機会をいただきまして大変うれしく思います。小塩節先生、九州の南の本学に遠路ようこそおいでくださいました。先生にはご多忙の中、今回の基調講演を快くお引き受けくださったと聞いております。心より感謝申し上げます。

私どもは先生の長年にわたるご研究の蓄積と豊富な体験、また諸外国との交流を通しての広い視野など示唆に富むお話の数々を伺えるものと楽しみにしておりました。私個人といたしましても先生のご著書に触れる機会があり、関心を持っているところでございます。また先生はカトリック関係の雑誌にもたびたび文をお寄せくださっていらっしゃいます。

本日のこの公開セミナーは本学のFD・SDの一環として位置付けております。カトリック精神に基づく人間教育を目指す本学の教育理念と建学の精神を理解する上でも

大変意義深いものではないかと考えております。先生のご講演の中から、私たち一人一人が本学の教職員としてそれぞれの立場で学びと気づきをいただき、今後の教育、研究に生かすことができると考えております。

小塩先生、本日のご講演をよろしくお願い申し上げます。簡単ではございますが私の挨拶とさせていただきます。

獅子目:ありがとうございました。続きまして講演者の小塩節先生のご紹介をキリスト教文化研究センターの岡村(和信)所長からお願いします。

岡村:本日の講師をされる小塩節先生のご紹介をさせていただきます。先生は1931年に長崎県佐世保市にお生まれになりました。お父様は日本キリスト教団井草教会を創立された小塩力(つとむ)牧師であります。

先生は旧制の松本高等学校で勉強された後、東京大学へ進学、ドイツ文学科を卒業後、東京大学大学院へ進学、そして修了されておられます。1958年、国際基督教大学専任講師、後に准教授を務められ、1970年からは中央大学文学部教授として大学教育に携わってこられました。また1967年から1985年まで18年にわたりNHKの「ドイツ語講座」を担当され、多くのファンを獲得されました。私もそのファンの中の一であります。

1985年から1988年まで大学在職のまま、当時の西ドイツ日本大使館公使を務められ、同時にケルン日本文化会館館長、帰国後も国際交流基金理事、国際交流基金日本語国際センター所長などを兼任されました。1997年に中央大学を退職後、フェリス女学院学院長、2003年には理事長を歴任され、現在はひこばえ幼稚園園長をされておられます。

先生はまた数多くの賞を受賞されておられます。ドイツ連邦共和国文化功劳大勲章、ドイツ連邦共和国功勞一等十字章をはじめ、日本放送協会放送文化賞、ゲーテ賞などを受賞され、また1999年には『木々を渡る風』という随筆で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞されておられます。

先生はドイツ文学がご専門ですが、ドイツ文学に関する著書や翻訳ばかりでなく、ドイツ語教育、幼児教育、音楽、そしてまた敬虔なクリスチャンとして多数の本を出版されておられます。本学の図書館にも数多くの先生のご本が所蔵されております。

先生は数年前に悪性リンパ腫と診断され、およそ1年に及ぶ闘病生活をされておられます。今はお元気になられ、今日はこうして私たちのセミナーのために東京からおいでになられています。本当に感謝です。

本日は「大学におけるキリスト教教育」と題しましてご講演をいただきます。演題は

とても硬いものではありますが、先生が長年ドイツ文学者として大学教育に携わってこられたこと、フェリス女学院の学院長、理事長として大学の運営、経営にも関わってこられたこと、そして何よりも敬虔なクリスチャンとしてキリスト教的人間教育に尽力されてこられたこと、そうした先生のご経験をもとにキリスト教と教育という視点から、私たち教員に携わる者が抱えるいろいろな問題について、あの熱く知的な語り口と、あの魅惑的なお声でお話いただけるものと思います。先生、どうぞよろしくお願いいたします。

獅子目:ありがとうございます。それでは小塩先生よろしく願います。(拍手)

小塩:ご紹介いただきました小塩でございます。もう声はかすれ、髪も薄れ、何の魅力もなくなりましてね、今は。今日はまたとっても硬いテーマをいただきました。日本の大学教育におけるキリスト教教育はいかにあるべきか、いかにあるかという題を徹底的に掘り下げるというご命令をいただきました。ほとんど絶望的な課題です。(笑)

この大学ならできるでしょう。日本の中で、キリスト教主義の大学であっても、キリスト教教育というものに成功している学校というのは本当に一つか二つ、三つというところが本音でございます。

今日は実は学生諸君の目を見て、顔を見て、この連中はちゃんとキリスト教教育を受けているだろうかを目で確かめようと思って、それでお引き受けしたんですが、学生はノータッチでどこかへいなくなって、あとお年を召した方とは申しませんけども、学生でない方々にお話を申し上げるという、大変皮肉な状況を与えられてしまいました。(笑)

それで今日は二つのことをお話しします。一つは大学というところでのキリスト教ってどんなもので、どんなふうになっているだろうか、あるいはどうあったらいいだろうということです。これ処方箋はありません。ありませんので、ご一緒に考えていきましょう。それが一つです。ちょっと硬いです。

もう一つは具体的にそういうところで働いた人が、ある仕事をした、あるいは一生懸命仕事をして死んでいったという、私の友人のお話、これはほとんど皆さんご承知ないと思うのですが、二つのお話を申し上げます。

初めは大学論みたいなちょっと硬いものです。副学長は文部省に長くおいでになられまして、文部官僚として全国をたばねておられますので、間違っているとお思いになりましたらどうぞ「違うよ」とおっしゃってください。文部省のお役人というのは厳しいですよ、大学人に対して。でも副学長はずっと柔らかくそうでいらっしゃいます。多分、大丈夫だろうと思いますが、間違っていたらぜひお直しいただきたいと思いま

す。

と申しますのは、大学ってこう考えますと、日本にはものすごくたくさんあるわけです。今、申し上げましたように、1,000近くあるんです。その中でいろんな考え方をいたしますと、国立大学というのが約200ございます。大学という名がついている、その中で本当に大学らしい大学というのは幾つあるかと勘定すると、まあ、そのうちいくつかだと思いますが、私はすぐその経営のことを考えてしまいます。

国立大学は独立法人であると言われておりますが、しかし財産、つまり資産です。土地と建物がなかったら学校法人としては認められないのですが、土地、建物は、全部国有財産でちゃんと保証されていて、そこで働いている若い人から教授に至るまで給与は全部国民の税金で賄っているわけです。あと研究、運営は自分でやれと。どうでしょう、副学長。そうですね。(笑)

副学長:はい。

小塩:ですから本当に独立採算でやっているのかなと思うと、どうもそうでもない。

しかし、ヨーロッパの大学、特にドイツなんかの大学に比べるとずっと苦労している。ドイツの大学というのは国立大学がないんです。全部州立大学です。州の政府が予算をちゃんと組んで大学をつくっていますから、ついこの間まで19しか大学がなかったんです。今は190ぐらいあります。その大学は全部その国費でやっているわけ、あるいは州費、州のお金でやっているわけですが、これがなかなか大変です。

非常にふんだんな予算を組んで、大学こそ国の将来のためなんだということです。私立大学は昔からずっとなかったのですが、今は二つございまして非常にいい働きをしています。

さて、大学というものを考えますと、私はすぐ経営のことを考えてしまいまして、理事長先生、学長先生のご苦労をすごく考えるんです。大変だろうな、学生数何人なんだろうと、岡村先生にお電話して、「何人います、1,000人いる?」「1,000人を切りました」と。「運営費、大学の1年間の予算は幾ら?」と聞いたら「秘密で言えない」と。(笑)こちらから「厳しいですね。先生の学科の予算はどれぐらい」、「それもちょっと」とおっしゃるので、全くご存知ないんじゃないかなと思いました。(笑)

これは後日談ですが、隠しているのか、知らないのかというと、理事長が立派でらっしゃるから全部しょっていらして下々は知らなくて済んでいる、非常にめでたい学校だろうと思います。でも本当に苦労なさっているだろうと思うんです。

学生数の1,000人いないということは、ほとんど私立学校(大学)としては、ほんとに苦しいころを渡っているような苦労がোধありだろうと思います。普通、私立大学と言われているところは5,000人の学生がいないと経営的には成り立たないと言われているんです。それを1,000人切った数でやっているんですから大変だと思いますが、

よくぞなさってらっしゃると本当に尊敬申し上げます。

経営のことをちょっと。いったい、どういうふうにお金を使ったらいいか、これは常識として申し上げます。学校あるいは大学にこれだけの予算があったとします。その予算をどういうふうにするかといいますと、どうしても人件費が一番高いんです。教授それから職員の方々のお給料が非常に大きい部分を占めます。

国全体の基本的な考えでは、校納金、つまり学生生徒が納める、入学のときにお払いする入学金。それからあと授業料、その他全部校納金、あるいは学納金というものの約50%で人件費を賄えていれば、これは安全圏だと。52%を超えると、これは緊張感です。55%を超えると黄色い信号がつく。60%を超えると、もうこれ赤だよ。これは今、日本中の大学で赤でない学校はないんです。補助金で何とかなっているだけで、校納金の50%という、人件費を抑えているという学校はまずないだろうと思います。恐らくこちらでもずいぶんそこは苦勞しておられていると思います。

それから残りのお金で運営費と研究、教育費というものに充てます。研究、教育費は普通25%といわれています。学生のために使うわけです。この25%をちゃんと維持しないと大学としてはまっとうではないというふうに判断をされます。こちらでは大体25%はちゃんとクリアしておいでになるようでございます。そして残りで管理運営をしていく。

ということで、この純心という学校は苦勞しておられるけれども立派な学校だということを、もう一遍申し上げます。

日本中、見ていましてね。国全体で言われているいろいろ監査をして歩いたり、検査をしたりなんていう仕事を私も幾つかいたしました。日本中の大学の財政状況はどうなっているかとか、あるいは財政だけではなくて、学校では必ず建学の理念というものがあります。建学の理念に沿ってそのとおりの教育を本当にやっているんだろうかということはかなり調べます。文部省のお役人も調べますけれども、私どものように、いろんなそういうものを調べる協会を私立学校でお金を出し合って作るということがあるんです。

それからまた、国がお金を出して大学評価表というようなものを作って大学を評価するということがあります。

そういうところで一緒に仕事をしてみて、本当に学校として健全体制でやっているなど思うのは日本では実に少ないと思います。

大学が建学の理念だけではなくて、実際に教育の目標として掲げるもの。例えば英語教育をしっかりやる、言葉の教育をしっかりやる、コミュニケーションを図りたい、あるいは実際の伝統をしっかりしたい、あるいはいろんな教育目標がございます。それに従っていろいろカリキュラムを立て、教授陣を備え、設備を整えて学生を迎えて

教育を受けさせる。それが一体うまくいっているのかということはかなり客観的に調べられます。

例えば、先生たちがちゃんとしているのか、それともいなくて成り立っている学校もありますけれども、しっかり先生たちをそろえて、そしていい教育をなさっているのかどうか、見当はつきます。学生がその後どうなっているかということも、おおよその評価はできるわけです。

その中で純心の教育目標あるいは建学の精神の二つを合わせたものを皆さんもよくご存じだろうと思います。その実態は、素晴らしいものでありまして、神様と人に喜ばれるということを目標にしています。もちろん聖母マリアに従って、見上げながらですけれども、神と人に喜ばれる教育がなされている。

ルカによる福音書の言葉を借りれば、神と人に愛される。つまり人間が成長していく若いときに非常に大事なことは体が伸びることである。背丈が伸びて、そして知識を増す。これに勝ることはない。しかし、それだけでは人間は駄目なんだということ。ルカは聖書の中に書いています。神と人に愛されて育つ、これが大事だということ。聖書は2度も語っているわけです。

それをこの大学の建学の精神、あるいは教育の理念として、具体的には誰もやりたがらない「嫌な仕事は私がやります」という気持ちで、先生から生徒まで一丸となっておられるということを見ると、こんな学校が世の中にあるのかな、日本にもまだあるのかという感じがいたします。

現場をこうやって見にまいりまして、ほんとによくやっておられるなということを感じます。

ただ、心配は、いただきました大学のパンフレットを拝見して、センスが素晴らしいと思ったのですが開けた途端に、英語を勉強する学生さんの数が少し減っている。ほんとに苦労してやっておられるのに、これを一体どうしたらいいか。いい教育をしておられる。なのになぜ英語を勉強しようという人たちが少なくなっているんだろうか。ここだけじゃないんです、実は。

日本中の学校で、英語が必要だ、英語を勉強しなきゃいけない、英語をしゃべりなさいと言うんだけど、小学校から英語をやろうとしているんだけど、大学で英語をしっかりと勉強しようという若者がどんどん日本は減っているんです。真面目に勉強したら阿呆くさいんです。ぺらぺらしゃべるようになる。だけどほんとに英語とは何なのか、言葉とは何だろう、言葉でコミュニケーションするというのはどういう人間の機能なんだろうとそれを考えて、あえてコミュニケーションを行うということ、今の若い人たち、ほんとに下手、あるいは嫌なんです。

コミュニケーションというのは、一緒にテーブルを囲んで、そしてパンを割く、ぶ

どう酒を回し飲みして、ご一緒に食べる、共にというところからコミュニティ、コミュニケーション、コモンといった言葉が生まれてまいりました。共にあること、共に生きていくこと、共に食べること、そして共に語ること、このコミュニケーションです。

これが実は今の若い人たちとても苦手なんです。猛烈な勢いでスマホをやるんだけど、目と目を相見て、しっかり目をのぞき込んで、本音でもって語り合うということは非常にまずい、あるいはやらない。言葉尻を捉えていろいろな摩擦を起こす。本当に摩擦社会であります。

コミュニケーションのことをもう少しお話いたします。私は先ほどご紹介ありましたように、東京のある教会幼稚園の園長を務めております。長いことやっているんですけれども、毎朝230人の生徒、子どもたちを、門のところで握手で迎えます。ところがお母さんたちも握手したいとおっしゃいますので、初め2、3人握手していたのですが、園長がひいきすると言われましたものですから、全部のお母さんと握手をして、それとさらにおばあさん方もです、毎朝握手するんです。お帰日も握手するんです。

そのときに必ず目を見て「おはようございます」、「さようなら」と言うようにしています。子どもの目を見て、子どもも横を向いて僕と握手するんじゃなくて、「園長先生の目を見て握手しようね」と言って練習をします。小さい子なら、そういう目を見て物を言うということを一生懸命やるんですが、どうしても人の目を見られない子どもも何人かはいます。どうして？　ここなんです、今の社会の様相は。

発達障害という言葉をお聞きになったことはおありだろうと思います。例えば自閉症であるとか、アスペルガーであるとか、勉強ができないとか、運動が苦手であるとか、人付き合いができないとか、いろんな障害があります。だんだん、だんだん日本の社会はそういう摩擦社会という、そして人と人との間のコミュニケーションがうまくいかないんです。

こんなに人の和を大事にする社会なのに、今は大体人口の6%、子どもたちの6%も発達障害です。大変な数なんです。全部が全部病気でどうしようもないというのではないです。ただ、発達障害ですから、コミュニケーションがうまくいかないんです。これが最大の病気なんです。どこでそれが分かるかということ、目を見ないということです。乱暴になります。小学校へ行ったら勉強ができなくなります。

それを幼稚園の間に発見して、療育係というものを自治体を持っていますから、療育センターと相談をして、そして養育ではなくて、療育ということを重ねて、だんだん人の輪の中でコミュニケーションができるように持っていく教育をしているんですが、一番難しいのはお母さんにそれをわかってもらうこと。

普通のお母さんたちは「いいえ、うちの子に限ってそんなことはございません」と

おっしゃいます。だけどそのお子さんは明らかに人の目を見られない子なんです。乱暴なんです、あるいは物が分からない、分かろうとしない、共同生活ができない。これが至るところにあります。とっても大変なのが今の日本の社会だと思うんですが、それを治していくのはいったいどうしたらいいかというのは、実はお母さんが絶対です。母乳をあげるときにスマホを見てるんです、今のお母さんは。

ついこの間まではテレビを見ていたんです。今はスマホを見ながら子どもに授乳をするんです。子どもの赤ちゃんを抱いて自分のおっぱいをやるとき、あるいは哺乳瓶でミルクを与えるときに赤ちゃんの目を見てあげるということをしないで、横を見ながらついでのようにミルクを与えている、それが一つ。

もう一つは明らかに遺伝子の軽い欠損です。これは残念ながら我々みんなあります。人間の遺伝子って複雑ですよ。何億かわからぬほどある遺伝子の中の一つがちよっと故障するということは誰にでもあるわけで、がんだって遺伝子の障害から来るわけですが、二人に一人はがんになる今の時代です。

遺伝子の欠損というのはこれは今の段階では治せません。今の医学では駄目なんです。目を見るということはできます。ですからお年を召した方は若い方のために、どうぞ若い世代に対して目を見てやってください。今からでもまだ間に合います。高校生でも間に合います。目を見て物を言う、目を見て応答をするという訓練をしていけば、必ず言葉は下手であっても、人間の魂から魂へのコミュニケーション、共に考え、共に語り合うということができていけるなと思います。

という意味で、ほかの教育はとても大事なんだけど、第一にやらなきゃいけないことはまず言葉なのです。そして外国語です。だけどそれが今はだんだん薄れてしまって、みんな外国語なんか勉強するのは大変だ、フランス語やドイツ語をやるのも単位を取るのが大変だと。ちょっとだけはかじっておこう。それはとても残念なことであって、日本はこれからそんなことだから衰退してしまうということをつくづく考えて大変ご苦労なさってらっしゃるんだろうけれど、この大学の第1段階であるところのコミュニケーションの学科がどうぞもう一遍復活してくださるようにと、心から、うざいことを申し上げて申し訳ございません、願っている次第であります。

さて、大学でキリスト教教育は可能なのか。実際に私が触れてまいりました、いろんな大学あるいは高等学校でこんなことがあるのです。一生懸命、聖書のお話をいたします。あるいは神学的なお話をいたします。学生たちにお話しするのは二つ可能性があります。一つは全学集会で全員義務として出て、そして出ないと単位がもらえない、あるいは出席のちゃんとカードというふうにして、1,000人とか500人、みんな集めてお話しします。みんなが聞いているようであります。でも一言も心の中に入っていないことが多い。

麦畑の上を風がすーっと渡って行って、向こうの端のほうですとんと落ちる。分かるんですね、話してて。お話をされていて、一人一人のところへ、目の中に言葉が入っていくのかなと思うと入っていかないで、すーっと向こうまで行って、すたとんと落ちたということが時々ございました。

今度は学生の立場から言うと、またやってるわ、どうせ神様の話だよねと、神落ちと言うんです。何でも最後は神様の話になるというので、神落ち。落ちるねというように分かっているんだ、分かっているからその間ちょっと英語の勉強でもしてという内職をしながら話を聞くということは時々ございます。大変残念なことだと思います。

ついこの間も、ある有名なキリスト教主義の大学がございまして、日本で3番目が4番目に大きい大学で、全学集会でキリスト教のお話をしろというので行きました。出席は二人でした。大きな講堂に二人おりまして、二人しかいない。出てきたから二人を相手にお話をしました。ある先生に「二人しかいなかった。そしたら二人もいましたか」と。(笑)

これ、キリスト教精神の大学でカリキュラムの中で、生徒たち、学生たちに本当に伝えていくことはとっても大変なことだなと思います。どうしたらいいんだろうと、結論を先に申し上げます。硬い大学の基準やなんかのお話はちょっと置いて、人件費が何%なんていうのは置いて、私の申し上げたい結論は、先生なんです。

そこに勤める先生が、本当に一生懸命勉強して、そして人間として一生懸命生きていて、そしてキリストを、マリアを、本当に見上げているかというのを生徒は見抜くんです、これは。恐ろしいと思います。見抜いたときに、あの先生のように、そばに行って先生に「駄目」なんていうことを絶対言われたくないから、遠くから見てるんだけど。あの先生はちゃんと天を仰いでらっしゃるんだ、あの先生が神と人を愛し、また愛されている人なんだということをちょっとでも感ずることができたら、それがキリスト教教育だと私は思います。

いくらアウグスティヌスから始めて、キリスト教の歴史2000年を歴史的に正確に神学的に語りに語って伝えていっても、試験をしても、それは頭の上のほうをすーっと通っていくだけで心の中には入っていかない。でも現実のここにいる日本の大学の目の前の先生が本物であるかどうか、それを若者たちは恐るべき感覚で見抜きます。

従って、先生たちが、今はここに40人先生方がいらっしゃる。一人一人が魅力ある先生でいらっしゃるならば、たとえキリスト教徒でなくても、洗礼をお受けになっても、この本学の設立の精神に賛同なさって、神と人に愛されたか、愛する人としてあっておいでになればキリスト教教育は可能なんだということを申し上げて、大変おこがましいことでありますが、第1部のお話したいと思います。

先生の魅力ということから第2番目のお話に移んですが、これまた個人的なお話

になりまして申し訳ございませんが、大学との関係もございますので一例としてお話を申し上げます。

横須賀という町がございます。アメリカ軍の海軍が軍港として持っています。かつては日本海軍の鎮守府の一つでございます。その横須賀の小児科のお医者さんに広瀬誠という友人のお医者さんがおりました。小児科の医者であります。慶應大学の医学部を出た人ですが、1930（昭和5）年生まれで、実は2005年に亡くなっております。75歳で死んだ、すでに亡き人でありますから、いくら語っても許してくれるだろうと思います。

この小児科のお医者さんというのは大変苦労しているんです。話が大変飛びますけれども、今はいろんな大学の医学部に進んだ若者たちが医者になろうとするとき小児科だけはなりたくないという人が非常に多うございます。続いて、嫌だなと思っているのは産科です。なぜかという、面倒なんです。

それから何か事故があったときに必ず追及されるんです。手術したときに失敗したから追及されるというのは、本当に1,000人に一人ぐらいのケースですけれども、小児科で赤ちゃんがちょっとでも出産に失敗して何か傷でもあったり、事故があったり、病気だったりすると医者は必ず訴えられます。

どこの病院でも、訴えられるケースが非常に多うございまして、新聞、テレビに出ないだけのことだったりします。ですから全て日本のお医者さんというのは保険を2重、3重に掛けます。病院も保険を掛けます。医者も自分で保険を掛けます。障害保険を掛けます。障害という、自分の障害ではありません。工作上発生する障害の保険です。2重、3重にしても警察が踏み込んできて、しょっぱかれるんです。

これは小児科が一番多いです。外科は割と少ない(笑)どうあったって文句の言いようは、気にされません。それから楽なのは割と精神科あるいは神経科でありまして、今は老人科と一緒になっています。だんだんみんな小児科やめて老人科、みんな老人になっていくわけです。

私の3年先輩でやっぱり精神科の医者になったのもいました。「僕、うつです」で有名な北杜夫というのが高等学校の3年先輩でずいぶんかわいがってもらいました。彼の面白かったところは非常に良い文学作品も書きました。父親、斎藤茂吉の伝記も書きましたし、『どくとるマンボウ』のユーモアあふれる、あるいは『検家の人びと』という非常に立派な長編小説を書いています。その独訳を出すということで、私は大いに苦労して、ついに彼が活着している間にドイツ語訳のこんな分厚い本を出して彼を喜ばせました。

ところが彼は「僕、うつです」と言いながら株をやったりして、みんなを笑わせておりました。なだいなだであるとか、遠藤周作とか、あるいは北杜夫という連中が、ほ

んとに自分の調子が悪いとき、これほんとにおかしいんじゃないかと。そう病あるいはうつ病、どちらかであることを正確に自分で判断して、お医者と相談をして、薬をもらえば大丈夫なんだということを自分の体ではっきり示しました。

北杜夫が出てきて以来、日本の精神科は「あなた、うつ病ですね」ということをちゃんとと言えるようになりました。若者がすぐうつになりますよね、今。勤め先でうつになっていっちゃう。それをどうしたらいいか。周りは「頑張れ」と言っちゃいけないんです、うつ病には。黙って見てなきゃいけないんですが、お医者さんは薬で必ずうつを征服し、治すことができます。今の医学はできるようになりました。

そのときに「あなたうつ病ですよ」ということを昔は言ったら、「こんな医者」と言って大変嫌がられたのですが、今は「あなたは北杜夫さんと同じね」と言えがいいんです。そうすると、みんな「あ、北杜夫(斎藤宗吉)と同じか。立派なもんだな」と言ってにこにこして、しっかり薬飲んでる。みんな薬は飲まなかったんです。例えばてんかんというのがございましょう。てんかんは大変な事故を起こします。泡を吹いて倒れるんです。あのてんかんも神経の病気なんですからちゃんと薬を飲めば抑えられる。

かつて大変だった病気だって実は薬で治るようになりました。しかし、このてんかんであっても、うつ病というのも、もう薬で治るんだということが分かって、それを人前で言うことをためらわなくなったのは北杜夫のせいだなということを時々思うことがございます。

こんなぐあいに病気というもののが今はとても日本の社会の中に、あるいは世界中に、ありとあらゆる病気がはやってしまいます。その中で人間がどうやって生きていったらいいだろうかということは毎日、毎日の苦勞の種であります。特に小児科、赤ちゃんの病気、これがポイントです。

なぜかというと、私どもは頭が痛いとか、あるいは膝が痛いとか、あるいは心臓が調子悪いんだとか、おなかが何か変なんだということを言えます。あるいはなぜだか分からないけどふらふらする、目がくらくらするということを自分で医者に言うことで、もちろん聞かない人もいます、分かってくれない医者もありますけれど、大体のお医者は分かって何か処方してくれます。「あなた、うつだよ」ということを言うお医者さんだっています。

ところが、話を戻して、小児科というのは言えないんです、ご承知のように。赤ちゃんは自分の病気のことが言えないんです。頭が痛いということを言わないんです、言えないんです。ただ顔が赤くなって泣くだけです、あるいは泣けなくなっていく。そういう赤ちゃんを診て、この病気は何だということを的確に判断して処置をすることができる小児科の医者というのはこれは大変なものです。

まず目で診るのは視診です。それから音を聞く聴診。昔はとんとん、もしもしやり

ましたけど、今は触診、手で触ります。とんとんはやりません。体を押さえてみるとか、肝臓が腫れている、心臓の脈がおかしいというようなことを、手でぱっと赤ちゃんを触るだけで訓練を受けたお医者さんは分かるんです。その訓練を受けなきゃいけないんです。

赤ちゃんは物を言わない、目を開けない、その赤ちゃんを診て、その命を救ってあげるといふ、その小児科に広瀬という男は、一生をささげた。だけどそれは小児科の仕事だけでは収まりませんでした。もちろん小児科から始まって、全ての人間のために彼は一生懸命技術を学び、それを駆使して生きてきました。

こういうことがありました。低体重児というのをご存じですか。昔で言う「未熟児」と申しました。お母さん方はご存じですよ。2,500グラム以下で生まれた赤ちゃん。この低体重児のかかりやすい病気は、目と胃潰瘍です。それを彼はみごと克服しました。(詳細約25分の内容省略)。

さて、これから本題に入ります。長いですよ。(笑)まだお帰ししません。もうちょっとお聴きになってください。この広瀬誠はあるとき横浜国大で教えていて、留学生の一人にミャンマー（昔はビルマと言った）から来た留学生が、私の国には無医村が多くて、お医者さんがいないところがとても多いんだという話をぼそっとした。片言の日本語でそう言った。「そうかい」と聞いて、それからいろいろ調べてみた。本当にそうだ。お隣の国々も、みんなそういうふうに似たような状況にあるときに、軍政府でがんじがらめになっていたミャンマーが一番ひどいということに彼は気が付いた。

今から18年前です。まだ軍政が非常に厳しいときで、アウンサンスーチーさんなんかも完全に監禁されていたそのとき、彼は思い立って、友人たちと語らって、ミャンマーの子どもたち、ミャンマーの病人たちを見てこようと思い立ちました。ランゲーンと昔言った、ヤンゴンから北のほうへずっと行くと、なるほど無医村が広がってます。広大な土地に畑はあるんだけど、人間はいるんだけど、病人がいっぱいいた。

「さあ何かをしようぜ、ビルマを助けにいこう」と彼は友人たちに語りかけました。早稲田の学生たちもボランティアで参加しました。しかし、忙しいお医者さんたち、大事な勤めもあります。ですからクリスマスの24日の礼拝も行って、25日の午前中のミサあるいはプロテスタントの礼拝に出て、そして26日の飛行機でサイゴン経由でミャンマーに入る。そしてたいてい5日か6日に仕事始めですよ。その5日の朝までに帰ってくるという、わずか2週間足らずの奉仕をしよう。医師10人です。

必要な診療道具を持っていけない。軍政府が許可しないんです。聴診器と注射器だけです。でもやっと注射器の消毒器は持っていくことができるようになります。あとお薬です。それからいいことに早稲田と横浜YMCAが数千本の歯ブラシを毎年用意してくれました。歯ブラシで歯を磨くということが病気の予防に非常に役立つ。つまり

歯が汚い、口の中が汚いということから病気その他、肺炎も起こります。まず歯ブラシをみんなに広めようと、そう考えて彼は言いました。

毎年冬2週間足らず出かけてきます。ヤンゴンから車で約15時間400キロですけれども、トータルで、今はもっと太い道路ができていますが、その当時の南北の道路というのは、道路整備をする人は囚人でした。足に鉄の塊を鎖につけられた囚人が道路を整備していく。でこぼこの道をだいぶ乗って約15時間走って、そしてそこで治療を始めようすると、剣付き鉄砲を持った兵隊がぐりとかこんで、到着してから終わるまで8時間だけ許可。それ以上はいけないという軍命令ですから、8時間と言っても荷物を降ろして、広げて、またそれをしまって車に積んで帰ると。8時間もそう、治療時間約5時間、弁当もとらず、水も飲まず、懸命に1日に大体300人ぐらい、多いときで800人の患者を診ました。

ありとあらゆる病気があります。懸命になって治療を進めます。それから学生たちが歯ブラシを持って村々を回りました。歯を磨けと。歯磨き粉はなくてもいい。塩。貴重なんだけれども塩を使うと一番いい。でも塩がなくてもいい。とにかく歯を磨け。「何で歯磨くんない」と言うんだけど、「歯を磨けば病気が治るんだ」と言って、とにかく学生には「そう言え」と。「理論は置いて、そう言え」と教え込んで、そして数千本の歯ブラシを毎年持っていく。毎年、8時間が9時間になり、10時間になり、とうとう2週間の許可が出るようになります。懸命に治療しました。

だけど消毒器、電気製ですよ。普通日本では今、注射器というのは1回使ったら捨てます。ところがそうはいきません。相手は何百人もいるところに何百本も持っていくわけにはいきませんから、消毒器で煮沸して使っていく、3回、4回と使います。その電気がないんです。電気がないから注射消毒器が使えないんです。

しょうがないので川の水を持ってきて、木を拾ってきて、火を起こし、そしてぐらぐらと煮たんだけど、その川の水は、上から汚物だとか牛のふんどとか一緒になって流れてきて、そういうふうに顔を洗っているんです。その水でご飯を炊いているんです。

その水で消毒するんですから、100度で消毒しなきゃいけない。とにかくそれで懸命に治療に治療を重ねて、すること13年。ついに治療がほぼ大丈夫だ、見当がついた。日本の大使館があります。そこの大使館と連絡をとって、ヤンゴン大学という国立大学は1校しかないんですけれども、そこの大学の医学部の研修生が必ずそこへ、北の村へ治療しに出かけていくという契約を結ぶことができました。軍政府はかたくなだけれども約束したことは守ってくれました。

最後に村の真ん中の広場に、小さいけどしっかりした2階建ての診療所が出来上がった。出来上がったその年13年目、最後の年、12月31日。今年は5日までいなく

ていい。家が、診療所ができた。これを神様に捧げて、みんなで感謝しようと言って、朝早く起きて、1999年の12月31日の朝、診療所の前にテントが出てきて、みんなで丸くなって礼拝をします。カトリックであれば、神父様がいればミサがあるんですけども、いないわけですから、みんなでかわりばんこにクリスチャンでない人も聖書を読みました。そのとき彼が読んだ聖書、ここで朗読します。彼は聖書を開いてこのように読み上げました。

「人の子は、栄光に輝いて天使たちを皆従えてくるとき、その栄光の座に着く。そして全ての国の民がその前に集められると、ヒツジ飼いがヒツジとヤギをわけるように、彼らをより分け、ヒツジを右に、ヤギを左に置く。そこで王は右側にいる人たちに言う。『さあ、私の父に祝福された人たち、天地創造のときからお前たちのために用意されている国を受け継ぎなさい。おまえたちは、私が飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ。』

すると、正しい人たちが王に答える。『王よ。私たちは、飢えておられるのを見て、食べ物差し上げ、のどが渇いておられるのを見て、飲み物を差し上げたでしょうか。いつ、旅をしておられるのを見てお宿を貸し、裸でおられるのを見てお着せしたでしょうか。いつ、病気をなさったり、しかもあろうことか牢におられたりするのを見てお訪ねしたでしょうか。』そこで王は答える。『はっきり言うておく。わたしの兄弟である、この最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである。』

この聖書を読んで、(マタイ25章31節から46節)彼は手を組んでお祈りをしたのでした。そのことは記録されて残っておりますが、一言だけ引用すると、「私ども、いと小さい者が、この荒涼たる地の最も小さい人たちのために何かをすることを許されてありがとうございます。神様ありがとうございます」とそう言うてお祈りをして朝の礼拝が終わり、車に乗り込む。がたがたの道をヤンゴンに帰る途中で胃穿孔(胃に穴が開く)で苦しんで、彼は途中で亡くなりました。西暦2000年1月1日の明け方のことであります。75歳でありました。

「いと小さき者のために、なすことを許されてありがとうございます」と彼は祈りました。何かをしたから神様は褒めてくれと言ったんじゃなくて、することを許されてありがとうございますと言っています。ここでお話を終えれば感動的なのですが、実はもう一つ、お話がここに続くんです。

実はその診療所を建てた村の長(おさ)がおります。その村の長は、治療が始まった13年前から白い目で彼を見つめていました。日本人がやってきて何をやっていやがるんだと、そう思って見ていた。なぜ。この村の村長さんは子どものときに、祖父母と両親を、幼い目の前で日本兵に銃の台尻で殴り殺されたのを見ていたんです。だから

日本人というのは、犬、鬼、畜生以下の憎むべき存在だと、そう固く信じていました。

その日本の者がやってきて、医療だとか、歯ブラシだと、余計なことをやっているんだから、兵隊たちも見てるんだから手出しはしない、見てようと、見ていた。しかし、この日本の若者たちとお医者さんは食べるものも食べず、懸命に治療に励んでいる姿を毎年、毎年見ていた。

あの日本兵たちは飢えていたんだと。どんなふうに飢えていたか、皆さんご承知でしょう。ついこの間、インパール作戦の記念事業というのがイギリス軍と日本の遺族の間で、ビルマとインドの国境で記念祝典が行われて、そこで日本兵3万人が死んだという悲しい戦場です。その近くでは、竹山道雄が書いた、『ビルマの豎琴』という感動的な物語が展開された場所でもあります。

でも私は日本のテレビも新聞もわざと黙って絶対に言わない。だけど私たちは本当に知っておかないといけないうこと、それはビルマ戦線に1944年の秋、日本の参謀本部は32万の軍隊を派遣しました。無理やりに送り込みました。ほとんどの兵隊はまともな銃を持っていませんでした。持っていた銃は、私が東京の府立の中学で使っていた三八銃。明治38年、日露戦争で使っていた銃です。それを取り上げて兵隊たちに与えた。兵隊たちは手りゅう弾を自分の腰につけて、鉄砲の弾1個だけ与えられて戦線に向かいました。

まだ中国大陆や、あるいはサイパン島やガダルカナルに行った兵隊たちは若い兵隊たちです。特攻隊になったのは少年兵です。だけどビルマに行ったのは補充兵でした。補充兵はたいてい40です。40になったら兵隊として使い物になりません。たいていは家庭の父親です。子どもを置いて出ていきました。銃は古い、古い日露戦争でロシアに勝ったんだという神風の神話を本当に信じた日本軍とその命令で32万人の兵隊が、補充も兵器も食料もなしにビルマに派遣されました。そのうちある者はインパールに向かいましたが、ほとんどは飢えて死にました。餓死19万人です。本当の戦死は3万人。残りもほとんど病人で帰ってきました。

ただ一番トップの将軍たちは戦争が終わる前に、関東軍と同じように飛行機で日本に帰っていきました。兵隊は死にました。そこまで私たちは知っています。32万のうち19万が死んだということは知っています。アッツ島でも全滅しました。日本の参謀本部はきれいに玉砕と言いました。硫黄島でもたくさんの日本兵が死にました。若い人たちが、老いた人たちも、みんな死んでいきました。でもそれに日本軍トップの日本軍に対する責任は問われませんでした。

外国の人に与えた傷については国際裁判で裁きになりました。だけど日本の人について、日本人についての反省も裁きもついにありませんでした。そしてもっとひどいことに、ビルマで19万人の人が死んでいったときに食料はどうしたのか。補給はない

んです。船で送ってこないんです、食糧は。現地調達です。現地にばらばらという村の人たちのところから食料を奪い取ったんです。それは日清戦争からそうでした。日清、日露の戦争のときには、日本の軍隊は懸命に船で或いは朝鮮半島を通して、満州あるいは中国に食料を送りました。それを森鴎外は軍医だったとき、それでも足りなくて、現地のものを調達しました。ビルマは完全に現地調達でした。中国大陸もほとんどそうでした。

だけどビルマの貧しい農村の人たちは、自分たちの食べ物をそっと地面の下に隠して取られないようにしました。だけど「出せ」と言葉は通じないです。でも分かりますよね。鉄砲の弾はありませんから、鉄砲を逆に持って台尻で何万人となぶり殺して食料を奪って、だけどそれで足りずに19万の兵隊たちが死んでいきました。国に残した子どものことを考えながら。

それを目の前で見たのがこの村の長でした。自分の祖父母と両親も、幼かった彼の目の前で台所の土間の上で殴り殺された親の姿を見て、泣きわめきながら彼は生き延びてきました。だから日本人が何かやっても全く無感動でした。でも13年が終わるこの年、病んだこの広瀬という医者が出した言葉を通訳から聞いた。ヤンゴン大学の学生が通訳してくれた。「いと小さき者のために、なすことを許されてありがとうございます」と。威張っているんじゃない、ありがとうございますと神様にお礼を言って、そして彼はふるさとに帰ることなく、でこぼこの道の上で75年の生涯を終えていった。最後の言葉は「患者が待っている」と言って死んだそうです。

眞の奉仕は「してやる」のではなく、「させていただく」感謝のわざです。そしてこの広瀬氏のように、眞の愛の奉仕は、もっと大きな奉仕によって返ってくる。村長さんの奉仕のように。

村長さんは自分の家の土地を提供して、ありとあらゆるお金を全部かき集めて診療所を造ることに協力をしました。今あそこはしっかりした病院になっています。私は今日、この「いと小さき者のためになしたるは、我がためになしたるなり」と主がおっしゃったという言葉の思い出すと、この純心の大学のモットー、神と人に喜ばれる。人が嫌だと思うことを「私がやります」と言ってこの4年間の学びを経ていく若い魂に、本当の神様の祝福がありますように、そして教えられる先生方お一人お一人の人間の本質からの言葉と魅力とが、子どもたちに、若者たちに、キリスト教教育とは何であるかを伝えていってほしい。神学や理論や理屈や哲学ではなくて、生きた人間が、生きた言葉で、生きた目で本物を伝えていくんだというお話を今日は申し上げたくて参りました。ではこれで、ありがとうございました。(拍手)

(終了)

(付記講師ご自身のご希望により、約半分に短縮した要旨です。口頭でのお話と、文章とは必然的に多少長短の差が出るからです。)

小塩節先生講演(その2)

獅子目:それではただいまから先生と皆さまの懇談に入りたいと思います。先生の該博な知識、先生の世界の広さと深さ、そして絶妙な話にすっかり魅了されたのではないかなと思います。私も大学職員の心にずいぶん多くのものが去来いたしました。また一般の皆様方におかれましても、教育改革が急な今、子育てや、あるいは人間としての在り方等について大に関心がおありかと存じます。

皆さまにはお気軽にご質問、ご意見、ご感想等をお願いいたします。またこれを機会にぜひ先生にお伺いしたいというようなことがあれば、関連の話題ということで取り上げたいと思っています。なおご発言の際は挙手をお願いいたします。係がマイクをお持ちしますので、最初に所属と名前をおっしゃってご発言ください。それではよろしくをお願いいたします。

どうぞどなたからでも。くつろいだ時間ということでございますので、肩を張らずに何なりと、こういう機会でないとなかなかお伺いすることもできないかなと思いますので、よろしくをお願いいたします。

小塩:しーん。(笑)日本的ですかね。

獅子目:どうぞ。

尾曲:ことばと文化学科の尾曲と申します。私は上智大学の出身なんですけれども。(笑)私が学生のときには神父さんは。

小塩:あのころはよかったんですね。(笑)あのころはよかった。

尾曲:あのころは最高だったんじゃないかな。神父さんたちが130人ぐらい、教員の4分の1ぐらいいらっやって、特に外国からいらっやって神父さんたちの教育の熱心さにとっても心打たれるものがありました。私はアメリカ人の神父さんに育てられたんですけれども、先月88歳で亡くなられていろいろ今考えているんです。

カトリックミッションの学校でも、一人も神父さんがいらっやらないとか、シスターがいらっやらない学校もあります。大学時代は神父さんを見ただけで何か真面目に、当時なってたんですけれども、そんなに神父さんやシスターが少なくなってきました、どうやってカトリックのミッションの役割を果たしていけるのか、そして一般の教職員はどんな手助けができるのか、ほかの教職員もいろいろな宗派の教育がありますので、あまりカトリックの精神というのを押し付けることは難しいような気がするんですけど、そんな中で先生はどんなことができると思われるか教えてください。

小塩:先ほど申しましたように、一言で言うと、先生が魅力的な人であってほしいと、そのことが一番だと思います。学識を幾ら積んでもやり過ぎることはない、学問をどんな深くやっても深過ぎることはない、そしてそれを学生たちに伝える人格というの

は幾ら深めても切りがない。でも建学の精神を伝えるとなったときに、でも人間として魅力のある先生がここにいるというだけで、学生は何かを感じ取ってくれる、それが一番いいキリスト教教育で、神学をいくらまねしても駄目だと私は思います。神落ちになってきちゃうという感じがするんですが、いかがでしょう。

今おっしゃった何十人ものいい神父さんがいらっしゃった、いい時代がありました。いや、あれは素晴らしい時代でしたよ、本当に。キリスト教大学の黄金時代でした。(笑)今は駄目なんでしょうか。先生はどう思いになりますか。例えば今、純心でキリスト教を若者たちに伝えるのは、どうしていらっしゃいますか。

尾曲:私はここで純心に32年目に入ります。上智と純心しか知りません。大学時代にカトリックの洗礼を受けたんですが、とてもここでは働きやすいんです。ただ信者の立場から言えない部分もあったりして、学生に対しても先生に対しても、言葉じゃなくて、できるだけ態度で示せるように心がけているつもりではいます。

小塩:先生方は、カトリックないし、キリスト者数というのは年々少なくなっていますか、変わりませんか。多くの大学で、例えば教員でもキリスト者の教授の数はだんだん減るんです。しかもたいてい年寄りだから、若い人が少なくなっている。だからあと10年たてば本当にキリスト者の教師たちの数が激減するだろうと、どこの大学でもそういう感じがしていますし、今はいかがですか。

尾曲:今もレイマンのカトリック神者というのは、ほんの数名だと思いますけれども。

小塩:今、カトリックの洗礼を受けたものとして、遠慮をするということをお考えですかね、例えば。

尾曲:そういった宗教的な雰囲気を出そうとするとときに、「私は仏教徒だから」みたいな。

小塩:ああ、おっしゃるのに対してこうであるというときに強くは言わないほうがいいと。

尾曲:はい。

小塩:そうですね。思いやりですね。遠慮じゃなくて思いやりだと私は思います。ありがとうございました。

松田:今日はどうもありがとうございました。私は鹿児島県の鹿児島加治屋町教会から参りました松田と申します。今日は本当に素晴らしいご講演をいただきましてとてもうれしく思っております。ちょうど私どもの教会で若い、お医者さんになって15年目という方が今度奄美のほうのお医者さんになって、「僕は新生児から高齢者までのお医者さんになりたい」と言って決心された方がいらして、私は信仰を持っていてほしいと本当に祈っているんですけれども、つい最後のお祈りを私がしないといけないことになって、本当に素晴らしい決断を与えて下さった神様に感謝します。

この先生が信仰を持っていたきたいと神様、よろしく願いいたしますということをお祈りして、ああ彼はちょっと負担になったかなと心配しておりますけれども、本当に今、先生の小児科のお医者さんの話を伺いまして、ああ、大変な決心を彼はしたんだなあと感じております。本当にありがとうございました。またこのことをその若い先生に伝えたいと思っております。ありがとうございました。

獅子目:ありがとうございました。ほかにございませんか。どうぞ。

濱田:看護学科の濱田といいます。実は質問があるんですけど。一つ、先生のお話の中で、村の長が、彼らが飢えてたんだと、その言葉を聞かせていただいたときに、何かすごく涙が出そうな感じがして、ちょっとそれをこらえるのが大変だったんですけど。何か今の社会情勢、世界情勢の中で中国だとか韓国などが、例えば日本を嫌いとか、そういうメッセージばかりが届くし、この前のイスラム国のああいう事件を目にすると、何かすごく身構えているとか、日本人としてすごく、ちょっとした被害妄想みたいな、何かそういう感じに自分はなってたんだという、そうじゃないというのを改めて感じさせていただきました。

一つ、とても抽象的な質問で出しにくい、なかなかちょっとあれかなと思うんですけど、先生が先ほどから、教師として魅力的な人間であることがまず大事とおっしゃっています。そのあたりを先生はどんな、その魅力的なところをもう少し具体的に、先生の思ってたところとどうな人間なのかを教えていただけないかなと思って質問させていただきたいです。

小塩:自分が魅力的でないものですから何とも言いようがないんですけども、教師のあるべき姿としては、研究と教育を懸命にやっている姿、それでいいと思うんです。その先生の口が悪かろうと、歩き方が下手であろうと、ネクタイがゆがんでいようと、髪の毛がぼうぼうであろうと、一生懸命やっていたらっしゃるというのが学生に伝わればそれで魅力なんだという思いがいたしますが、いかがでしょうか。何かね、格好を良くきれいにという意味ではないんです。

さっきおっしゃったことの中で、中国や韓国の人が我々を嫌いだと思っているというのは、逆に言うとも我々がそうだから向こうもそうなんです。我々は日清戦争のころから、チャンコロと言い、朝鮮人と言い、人々をあざける、そしり、卑しむとか、そして彼らの土地を、あるいは命を奪ったんです。100年です。それで何も過去はなかったなんて、過去のことは問わずに未来志向でいこうと。それは分かりますよ、分かっていますが、過去のことをうじうじ言っているのは必要ないというのは、過去は過去で冷静に我々は何をしたのか、だから彼らがそういう反発をして、逆に我々も身構えるんだという、この悪い因縁は冷静謙虚に解かれなくてははいけないと私は思います。話が、ちょっと政治的になっちゃいますけど。

獅子目:ありがとうございます。子どもは教師の後ろ姿を見て育つという言葉があります。教師のその向こう側に自分の将来を投影しているんだと思います。そういった意味では本当に魅力的な教師になるという、そういう努力が我々大学も必要なのかなと、そのように感じました。ほかにございませんか。

小塩:ただ、魅力的になろうと思ってもなれないですよ、自然になるものでね。

獅子目:難しいですね。

小塩:なれなかったらこうべを垂れてね。

獅子目:いらっしゃいますか。

末永:こんにちは。私はこども学科3年の末永と申します。この中で唯一なのかどうか分かりませんが、学生でございます、本学の。今日は貴重なお話をいただきましてありがとうございました。

私はほんとにキリスト教の信者ではなく、また今まで、この大学に入るまでキリスト教というものに触れてくる機会も少なく生きてきて、今はここにいます。この大学に来て、キリスト教徒でない自分にとっては、ほんとに宗教というものとしてのキリスト教という、硬いイメージとか、またやっぱり、朝屋ミサをやったりとかという、ほんとに生活に厳しいとかという、そういう先入観がある中で、ここに来て私はキリスト教を、そういう先入観をやぶってひとつの文化として学びたいと思ってこういう講演を積極的に参加させていただきたいなと思って来たんです。

今回教師の生き方を学生にどう教えるかということを先生にお話しいただいたんですけども、逆に私たち学生というのは、その先生の一生懸命な姿からどういう姿勢で学べばいいかということを私はちょっと知りたいなと思って、小塩先生は学生にどういう姿勢で学んで欲しいのか、どういうところを問題意識として持って学んでほしいのかということを今、お聞きしたいなと思って手を挙げました。よろしく願いいたします。

獅子目:末永さん、学科とか学年をもう一回教えてください。

末永:国際人間学部 こども学科3年です。

獅子目:将来、学校の先生になりたいという、そういう学生です。

小塩:たくさんあるんですけど、一つだけ申し上げれば、しっかり質問する学生であってほしいなと思います。授業中でも、講義が終わった後でも、手紙でも、何でも先生に質問する。問いたです、食いが違って、いいものをその先生から奪い取ってやる。学び取る。そういう学生であってほしいな。

「へへ、あのばか、知識振りかざしやがって、へっ、何あれ」というのではなくて、「おっ、やってるの。一生懸命生きてるな。そこのところをもう少し知識をちょっと分けてもらおう。今日の説明だけでは分かんない」と食いが違ってくと伸びると思

います。食い下がらない人は、それっきり、縁なき衆生であるという感じがしていますが、今日はあなた、ようこそおいでくださいました。

いや、僕ね、「学生の人と会いたい」と言ったら、本学の先生は「駄目だ、学期は終わった」とおっしゃる。(笑)「おじいさん、おばあさんばかりですよ」と伺って、そうでもないんじゃないかな。ねえ。(笑)さあ、どうぞほかに。今の質問、いい質問でしたね。

獅子目:授業の中でも食い下がってくる学生なんです。

小塩:おっかないですね、それは。(笑)素晴らしい。

獅子目:ほかにございませんか。

小塩:はい、どうぞ。

女性A:どうも今日はありがとうございました。私も今日なぜ来たのかなと思ってたんですけど、ほんとに先生が最後に「いと小さきものにしたのは、私にしたのである」という、その神様の言葉が聞こえてきて涙が出たんです。

私は奈良女子大学に入って卒業したんですけど、そのときに英文科の先生がクリスチャンで、私は家政学部で住宅設計を勉強してたんです。数学科の授業とかに、英文科の授業も受けたいと。ほかの学科も受けることができたので、ミサに伺ったりとかいろんなことができたんですけど、その先生と出会いがあって、その先生の教室にも、教授の部屋にもみんなで入ることができたので、その先生には触れることができて、自分は建築現場に行ったり、学生運動もしたり、本当に宗教とは全然関係ない生活をしてたんですけど、その先生と出会って今はクリスチャンに、そのときに3回生とか、20歳のときにクリスチャンになるんです、ある日、突然。

でもほんとに先生との出会いで自分にチャンスが与えられて、今振り返ったら、大学の先生と個人的にというか、グループですけど接触する機会があって自分は今あるんだなということを自分の大学時代を振り返って、すぐ今は感謝の気持ちがあふれてきて。私は積極的に出ていくほうではなかったけど、小さい、ちょっと一歩踏み出したところで先生に出会うことができて本当によかったなあというふうに感謝ができていて。

そして私が今教えるということに、2カ所入学したこと、今もしててとかそういう昔もしたんですけど、先生が今日おっしゃった、生徒に体当たりするというか自分自身をほんとにぶつけていくということを見ると、生徒のほうが見つけてくれるんじゃないかなという、それで何か影響あるんだろうと思っているけれど、生徒は受け取っているということがあるんじゃないかなというふうに思っています。

すみません、質問じゃないんですけど、本当に今日は先生のお話を聞いて自分の中にもやっぱりこれから誰に出会うか分からないけど、その出会う生徒とか出会う人たちに対して小さいことをしながら、ほんとに自分自身をぶつけていきたいなという思

いを持つことができ感謝します。

小塩:素晴らしい証言が出てきました。もうこれで今日のお話は終わりということに。(笑)聖書が、怖いのは、この次があるんです。この「いと小さき者のために、しなかった、私に対してしてくれなかった」こととあります。牢獄にいたとき来てくれなかったねと。普通牢獄にいた人を訪ねませんよね。裸の人に洋服をあげる、食べ物のない人を助けてあげる、被災地に飛んでいく。これはできる、だけど牢獄にいる人に見舞いに行つてあげる、これはできないですね。だけど聖書はそういう言うんです。怖いですね。

さっきからいいとこだけをお話しましたが、このようにその次があるというのは聖書って怖いと思います。さあ、真面目なおっかない話ばかりじゃなくて、何か別のお話はありますか。

岡村:キリスト教文化研究センターの岡村です。先生、一つ、その「いと小さい者にしたことは、私にしたことである」ということは、結局は学生の中にイエス・キリストあるいはマリア様を見て、そして接しなさいということなんですよ。先生はそれをおっしゃりたかったんですよ。だから学生一人一人の中にイエス様がいる、あるいはマリア様が存在している、そう思って接しなければいけないということを、それがキリスト教的人間教育の根本になるんだということを先生はおっしゃりたかったんですよ、確かに。

小塩:ありがとうございます。皆さんがそう説明してくださると素晴らしい。ほかはよろしゅうございますか。理事長先生、学長先生、何か「ここはけしからん、訂正せえ」ということはございましたか。

獅子目:よろしいですか。

松下:はい。

小塩:どうぞお座りください。

松下:今日は本当に心に染みるお話をありがとうございました。先生はヨーロッパのご生活が長くいらっしゃって、いろんなヨーロッパの方々と接する機会もおありだったと思いますが、日本人の感覚と、あちらの方の、もちろん国民性も違いますし、文化の背景も違うと思いますが、やはり人間としてお互いに関わるという意味では、言葉や文化的な背景を超えて生身の人間同士の底の部分のベースがあると思うんです。それを理解しながらも何かあちらの方々といろんな交流の中で、先生が日本にないものを、素晴らしいものをあちらの方から感じられた経験がございましたら教えていただければと思います。

小塩:それはもうたくさんありまして、数知れないほどございます。一つだけ申し上げます。ついこの間、亡くなった西ドイツの大統領を10年間したりヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカーという大統領がおられました。若い方はもうご存じないと思い

ます。

西ドイツというのはドイツのちょうど3分の2ぐらいのところで、東側に旧社会主義の東ドイツがありました。これがベルリンの壁が1989年に崩壊して、東西が統一して今のドイツというので人口が約8000万の国ができたんですが、その前の西ドイツと言われた時代、私どもは普通「ドイツ」と言っておりましたが、大体その部分です。その大統領に就いたフォン・ヴァイツェッカーという人がおりました。

私は大変幸運にもこの人と非常に親しくなることができました。というのは、ちょっとおかしな話なんですけれども、いろんなドイツ生活をしておりまして、そのうち1985年に外務省に頼まれまして大学の職をそのまま置いて、外務省に来てくれた。西ドイツのボンというところにあった大使館の文化担当公使になってほしい。

ドイツ中に対して文化交流する人が欲しい、ついては来て大使館と、それからケルンに日本文化会館というのがあるけれどもそこを見てくれと言われて、参りました。早速向こうの一番偉い人、日本でなら天皇ですけれども、大統領のところに表敬訪問に行きました。すごい鋭い目をした、わし鼻の堂々たる人でした。

私を抱き囲み込むようにして「よくいらっしゃいました。日本のことはよく存じておりました」というお話をなされた。この人が有名な戦後40年のときに、ドイツの国会で演説をしたのがついこの間の日本のテレビでも紹介されました。

「過去に目をつぶる者は現在に対して盲目になります(ドイツ語にて繰り返す)」と言って、若い人たちを、そして年とった人たちをもいさめて、「ドイツはひどい目に遭った、ドイツはみんなにいじめられた、ユダヤ人を殺したというけれど、ヨーロッパ中がそうだったじゃないか。みんながやったじゃないか。俺たちに先にやらせておいて何を言っているんだ」というのがずいぶん多くのドイツ人の実は本音なんです。

そうじゃなくて「我々が悪いんだ、人のことを言うんじゃない」ということを彼は大統領として訴えて、そしてウィリー・ブラントという首相がいたんですが、彼を派遣してポーランドに行って和解のおわびを言わせたんです。国の代表がどこかの国に行ってもひざまずいてわびるなんていうことは歴史上あまりないんですけど、ドイツ人はそれをやりました。しっかりやったから今、世界中から尊敬され、大事にされ、あってほしい国と言われています。日本は本当にあってほしい国と言われているだろうかと思うと胸が痛くなります。

獅子目:ありがとうございました。

小塩:一人だけ申し上げました。かかる指導者を持ちえた戦後ドイツは幸せでした。

松下:ありがとうございました。

小塩:この人は本当に深い信仰の持ち主でした。

獅子目:そろそろ時間が迫ってまいりましたけれども、もしどうしてもということで

あれば、どうぞあと一人承りたいと思いますが、よろしいでしょうか。

小塩:ここにシスターの方々もたくさんいらして素晴らしいですね。(ここで旭川の修道院での話あり。残念ながら省略する、小塩)

小塩:これで終わり。

獅子目:どこまで行くのか、横で心配になりました。

小塩:心配ですよ、ほんとね。

獅子目:先生の素晴らしい話術に魅了されました。時間が過ぎるのも思わず忘れてしまいましたが、本当にお時間が過ぎましたので、このあたりでお礼の言葉を、同じ所員である藤尾先生のほうからよろしくお願いします。

小塩:その前に皆さんも歌をご存じでしょう。クリスマスの歌です。ご存じでしょう。ラララでいいから、ラテン語で歌いましょう。ラテン語は一般基礎教養です。(～0:38:45歌)(拍手)

藤尾:何とお礼を申し上げればいいのか、大変今は迷っているところなんです。今日は本当に素晴らしい時間を、先生ありがとうございました。もう本当に涙を流しながら深い感慨を持って先生のお話を伺うことでございました。本当にありがとうございます。

今日、先生がテーマとして掲げていただきました「大学におけるキリスト教教育」、そしてお話をしていただきました具体的な事例の数々は、まさに本学の建学の精神であります「キリスト教的ヒューマニズムに基づく全人教育」ということを改めて確認する、そういう貴重な機会になったのではないかと思います。これからも、私どもは誇りを持ってこの純心教育を進めてまいりたいと思ったところでございます。

皆さまご承知のとおり、先生のご専門はドイツ文学でございますが、先生のご本を拝読いたしますと、先生は本当に幅広く豊かな知性といえるでしょうか、単なる教養という言葉では語り尽くせない深い学識をお持ちでございます。特に長くドイツにお住まいになったということで、トーマス・マンをはじめとする世界的な文学者はもちろんのこと、先ほどもお話にございました西ドイツの大統領ヴァイツェッカー氏など、そのほか多くの芸術家の方々など交友関係はまことに幅広く、驚きを禁じ得ません。

私は音楽の教員でございますが、中でも先生の本を拝読しながら大変うらやましく思ったことがございます。20世紀を代表するソプラノ歌手のシュヴァルツコップのお宅に先生が招かれて、楽しい時をお過ごしになったこと。フィッシャー＝ディースカウとも、本当に楽しいお時間を過ごされたというようなこと、本当に私ども音楽をする者にとりましては想像できないような素晴らしい体験だなと思うことでございます。

実は今、ご披露いただきましたけれども、先生は音楽にも大変ご造詣が深くていらっ

しゃいます。もう30年も前になりますでしょうか。NHKの教育テレビ、今は「Eテレ」と言っておりますけれども、「N響アワー」という番組がございました。作曲家の芥川也寸志さん、芥川龍之介の息子さんです、それと「おさかな博士」と言われた杉浦宏先生と一緒に先生がレギュラーで出演をしておられました。そのころから先生の柔らかいバリトンの声、きっとドイツ・リートなどを歌われたら素晴らしいのだらうなと思っておりまして、図らずも今日は先生の歌まで拝聴できて幸せでございました。

もう一つご紹介したいと思います、先生は大変なモーツアルトの愛好家でいらっしゃいます。先生のご本の中に『愛の人 モーツアルト』という本がございます。その一節を少し引用させていただきます。

「この土地、モーツアルトが生まれたザルツブルクというオーストリアの町です。『サウンド・オブ・ミュージック』の舞台にもなりました。この土地の人の好んで言う言葉に「ハイターカイト」という語がある。清朗さ、ほがらかさを表すこのことばは、はれぱれとした人の心の明るさを示すのだが、それだけではなくてもう一つ山の空にも使う。アルプス山頂の大空の清朗さをも表すのだ。」と言っておられます。そしてモーツアルトの音楽について、「私はこのチロル・アルプスの「ハイターカイト(晴朗さ)」ということばで言ってみよう。」と述べておられます。

私もモーツアルト大好きな人間の一人でございますが、モーツアルトの音楽をこれほど適切な言葉で表現された例を知りません。モーツアルトの音楽こそ、モーツアルトという天才を通して私たち人類に与えられた「神の愛」なのではないかと、そういうふうに思います。

ドイツ語でLiebe ist wie Grundwasser 「愛は地下水のごとく」と。これも先生のお言葉でございますが、今日の先生のお話を伺いながら、実は先生ご自身こそ愛の人でいらっしゃるのだと確信した次第でございます。

大変勝手な感想で申し訳ないんですが、本当に、本当にすてきな時間を過ごすことができました。先生、ありがとうございました。

獅子目:ありがとうございます。それでは感謝の意を込めまして花束をお贈りしたいと思います。

小塩:ありがとうございます。(拍手)恥ずかしいですけど、さよなら。(笑)

獅子目:拍手でお送りください。本当にありがとうございました。(拍手)どうもありがとうございました。本当に皆さん、お疲れさまでした。最後まで先生に仕切っていたいて、司会者としてほんとに楽をさせていただきました。ありがとうございました。終わります。(拍手)

(終了)